

「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」(使 16:31)

これは、神様のお約束です。まず、藤井師がどのように主と出会われたか、その喜びを言い表していく中で、職場や家庭で主が次々と救いのみ業を見せてくださった事を証しされた。

主のお約束のみことばを信じる時、実は主にとって不可能なことはないことを知らされる。しかも主はそのために備えをしておられることに気づく。

ご家族の救いへの準備段階の具体例として、お正月に家にはご主人と2人の子供がおり、教会からお正月に各々の家庭で読む聖書箇所が決められていた。ふと一緒に聖書を読んでみないかと問いかけ、「そうしよう、そうしよう。」とみんなで読むことができた。ごく自然にそう言えるように、実は神様がその場の雰囲気を用意しておられたのだ。

ご主人に対しては、自分の願っている夫婦関係とは程遠く離婚を考える時もあったが、自分の内側の偽善に気づき、苦しみがく中で、どうにもならず主に叫んだ時、主は速やかに先生を変えてくださった。やがてご主人の退院の折に自分の気持ちを伝える大切な機会を祈りつつ待ち望んでいた。主はその時を与えてくださり、先生は心から詫び、ご主人もまたすまなかったと詫びられた。心のふれあう瞬間であり喜びの抱擁となった。ご主人がイエス様を心から信じ迎え入れた時でもあった。ご主人が天に召される直前、「君と結婚できてよかった。」と言い、「私もそうよ」と真心こめて言えた。この話は、参加者皆の心に深い感動を与えた。

家族伝道をしなくてはと気負い頑張ってしまう。結果が見えず、反発されると落ち込み、自分を責める事に対し、藤井師は言われた。「私は伝道しようと思ったことはないのです。恵みの現実、喜びの現実をおしゃべりしただけです。全能の主を仰いでお任せし、すでに備えてくださる事をキャッチさせてもらう霊的な感覚を養っていただき、主のそばに留まって主の御用聞きとしてみ言葉に従うことなのです。主は御用聞きとしての私達に花を持たせてくださる方です。主と共にみ業を喜び賛美するという花を。」

〈メンバーの話の中から〉

ご主人に早く先立たれ、3人のお子様がみな小児科医になっておられる方が、子供の救いのために祈っているとされた時、「私も小児科医、私の証しの本『輝く日を仰ぐとき』をプレゼントされては」と提案された。彼女は喜んで本を買い求めておられた。

子どもの魂の生まれ変わりをひたすら求めていた母親が、あるとき、そのために祈って欲しいと外国人の恩師にお願いした。師は彼女をじっと見つめて、「子どものために祈ることをやめなさい。あなた自身のために祈りなさい。」と言った。彼女は大きな衝撃を受けた。自分はキリストをどのようなお方として信じているのかと鋭く問われた。自分の信仰はOK、子供の信仰をしっかりとらせてくださいと願っていた自分の傲慢さに気づき、主の前にひれ伏した。我信ず、信なき我を助け給え。と叫んだ父親の姿と自分自身が重なった。その子はその先生のセミナーですっかり生まれ変わった。どのようにしたか誰もわからない。主のみ業を賛美するばかりであった。

最後に藤井師は「みことばを読み、イエス様をますます深く愛し知っていくことこそが鍵ですね。」と一番大切なこととして言われた。